

巻 頭 言

研究は社会に生きてこそ真の価値がある

紀要委員会の皆様のご苦勞のもとで、本年度の紀要ができあがりました。本年度は、査読に関する相談もなく、スムーズに進められたようで、査読の力も向上してきたのかと、嬉しくもあります。

先日、ある大学の研究報告会に評価者として呼んで頂き、出かけてきました。最も強く思ったのが、地域の看護、福祉の質の向上に関する研究の多かったことです。世の中が、埼玉県が、よく見える研究データが沢山ありました。今後、何をすべきかが必然的に見えてきました。そして、研究は、社会に活かされてこそ意味があると実感しました。少なくとも、自分が行った研究は、自分の仕事の中で活かしていかなければならないのだろうなと思いました。また、仲間の研究にもっと関心をもって、その評価を返していく習慣も必要かと考えたりしました。

もうひとつこうありたいなと思いましたのが、本学同様、複数学科のある大学でしたが、学科をこえた共同研究が多かったことです。大学の方針であるとも聞きました。こうした共同研究は、互いを理解し合う機会にもなりますが、研究という視点では多角的に考えるという意味で大きな価値があるという気もしました。看護学科でも、これまでも何件かのそうした領域をこえた研究もありましたが、真の共同研究たり得るためには、研究計画の初めから、データの解釈から、ともに意見交換をすることが必須条件かと思います。

本年、初めて学会発表の研究の報告会を持ちました。教員同士が研究者中心の語り合う姿をみながら、もっとこういう機会を多くもっていくといいのかと思いました。次年度は紀要委員会に研究推進の役割を担って頂きます。看護学科の教員が刺激し合い、励まし合い、認め合うことにより、真の研究の価値を実感し、よりよい成果をあげていけることを願っています。少なくとも、私たちの紀要を大切に読んで、感想・意見を返していったこそ、研究の、委員会の活動への価値が確信できるのでしょう。

本年度は、沢山の研究成果が紀要に報告されました。紀要委員会委員の皆様、ご苦勞様でした。ありがとうございました。

平成 23 年 3 月吉日

埼玉医科大学保健医療学部看護学科

学科長 岡部 恵子